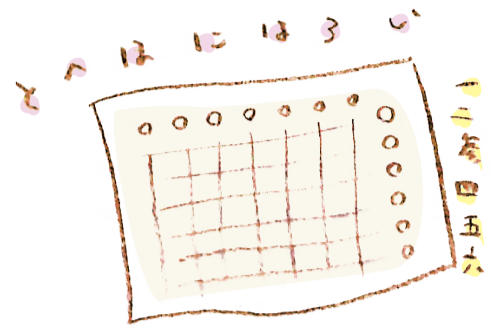


いろはうた

墨付けをするにあたって、番付というものがあります。
基本的に建物正面からみて右奥を「い」として、
「ろ、は、に・・・」と左へ振っていきます。
そして手前に一、二、三と番号を振っていくことで、
建物のどこに材料を設置していけばいいかがわかるわけです。



そして、「いろはにほへと」は、「いろは唄」で調べると色々なことが書かれています。

いろはにほへと ちりぬるを
わかよたれそ つねならむ
うゐのおくやま けふこえて
あさきゆめみし ゑひもせす

色は匂えど 散りぬるを
我が世だれぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて
浅き夢見じ 酔ひもせず

もう少し崩してみると

香りよく色美しく咲き誇っている花も、やがては散ってしまう儂きもの。
この世に生まれた私たちとて、いつまでも生き続けられるものではない。
この無常の、有為転変の迷いの奥山を今乗り越えて
悟りの世界に至れば、もはや儂い夢を見ることなく、
現象の仮相の世界に酔いしれることもない安らかな心境である。

このように、人生の奥深さを表現しているものを「大工」は何を思い、墨をつけていくのか。
そう。

どんな生き物や物もいつかは朽ち果てていくもの。
儂き存在故に、明日死んでしまうかもしれないことを思い
今日一日を一生懸命生きて
果てしない未来に、気持ちを込めて墨を入れ
いつか見るであろう次世代の大工に恥じぬよう
刻んで行くのです。

いつでも、忘れないでおきたい気持ちです。

